逃亡

日常という空気が漂ってゆく
それ自体が生であることを僕は疑わない
ひとつ足を踏み外しもしようものなら、たちまちに
待ち構え続けていた鰐どもに踝（くるぶし）を噛まれ
二度と戻れなくなるという
そんな危うい平衡の下に保たれている———
そのようなものとしての日常という空気
その空気が漂う世界

お前はそこに、さらに何を持ち込もうというのだ
自虐だの、激越な官能だの、白目をむいた思想だの
そんなものを持ち込みたかったら
お前自身がまず、この陽射しの下から出てゆくがいい
理解を拒否するがいい
そして理解を拒否されるがいい
孤独の中に自らを慰めて涙するがいい
その中で崇高な己を高めることはお前の自由だ

お前の胸に聞いてみるがいい
羨望という妖精の突然変異を培養していないか
虚栄という花の種子の遺伝子を変えようとしていないか
それら愛らしい旋律を塗り潰す転調を行っていないか
日常に埋没する人々の胸のうちに耳を傾けてみるがいい
憧れに満ちた眼差しが奏でる歌を
哀しみに差し出された掌に包まれた歌を
天に雲、地には花、という呟きを

(2004.3.14)